

金扇馬標

この金扇のような馬標は、戦場で一目でわかるように設計されている。戦闘中に指揮官の位置を示すために使用された。馬に乗った武将のそばで、丸腰の兵士が旗を高く掲げるのが役目であった。

金扇馬標は木や布を塗って作られ、瓢箪、鈴、提灯、半月、傘などさまざまな形があり、徳川家康公(1542-1616)はこの金扇を使っていた。長さは 2.2 メートルで、現存する規格品の中では最大級である。4 本の絹布を縁で縫い合わせたものが扇面である。10 本の竹の肋骨には黒漆が塗られ、枢軸には黒皮のバンドが掛けられている。片側の 3 本の革紐で竿に取り付けることができる。

徳川 14 代将軍家茂(1846-1866)が使用したものでもある。1894 年、幕府滅亡後の初代当主である徳川家達（1863-1940）より久能山東照宮に寄贈されたものである。